

大智禪師偈頌

鳳山山居（その七）

空林卓錫卜幽栖

空林くうりんに錫しゃくを卓たてて 幽栖ゆうせいを卜ぼく

冷淡家風実可悲

冷淡れいたんの家風かふう 実じつに 悲かなしむべし

荷葉満池無線補

荷葉かよう 満池まんち 線せんの 補おぎなう無なし

白雲為我坐禅衣

白雲はくうん 我わがが坐禅ざぜんの 衣けいとなる

この一首を吟誦して思われることは、大智禪師が如何に大梅法常禪師を敬仰しておられたかということである。

大梅法常禪師は馬祖道一禪師の法嗣である。如何なるかこれ仏、という問いに対して馬祖が即心是仏と示された。法常はその語によって開悟し大梅山の奥深く山居し冷巖枯淡、実に素晴らしい家風を打立てられたのである。

道元禪師はその行持を、

大梅山の絶頂にのぼりて、人倫に不群なり、草庵に独居す、松実を食し荷葉を衣とす。かの山に小池あり、池に荷おほし、坐禅弁道すること三十余年なり、人事たえて見聞せず、年暦おほよそおぼえず、四山青又黄のみをみる。おもひやるにはあはれむべき風霜なり。師の坐禅には八寸の鉄塔一基を頂上におく如戴宝冠なり、この塔を落地却せしめざらんと功夫すればねぶらざるなり。

と述べられている。この山居生活が見つかつて是非、山を下りて貰いたいと懇請すると次の一偈をもつて答えられたのである。

摧残せる枯木寒林による

幾度か春に逢へども 心を変えず

樵客すらこれにあえども なお顧みず

野人えいじんなんぞねんごろに 追尋することを得ん

自分はもう摧残枯木だ。くじけきつた枯木、冬がれの林の中に突っ立っている状態。これは皮膚脱落し尽きて、唯一真実のみありという徹底した坐禅の境地のことである。

幾度春に逢うても、秋に逢うても、相手のない坐禪の境地だから変りようがない。

樵客、きこりさんもこんな木は振り返って見ようともしないのだ。まあ、世間的にはそんなにお粗末なんだ。

野人よ。立派な大工の棟梁さんよ。心にかけて、そんなに追尋しないでくださいよ。

そう言って大梅山を下らずそのような懇請に応じないばかりでなく、更に山奥に入ろうと  
いつて次の一首を示されたのである。

一池の荷葉、衣、尽くることなく

数樹の松華、食、余りあり、

まさに世人に 住処を知られて

更に茅舎を移して 深居に入る

この大梅山には池があり、その池いっぱい蓮が生えている。その蓮の葉で衣を作れば無  
尽蔵である。また松の実が沢山あつて食べるに何の不自由もない。これ以上の処はないのだ。  
追われるなら庵を山奥に移すといつて脚下照顧せられた。これが大梅法常禪師の護聖寺を開  
創された実に勝れた芳躅である。

大智禪師は菊池公の請に応じて此の鳳儀山に赴錫されたが、別段伽藍の完備を望まれた訳でない。此の幽玄閑寂の空林に、道場を結界されたのである。縁によつて錫を留めるところは何処も道場であるが、道場ともなれば、矢張り「容身の地を護持すべし」である。坐禪弁道も場所を選ぶし、伽藍建立も場所を選んで結界するのである。

大智禪師はこのように大梅山護聖寺を仰慕されつつ鳳儀山に聖護寺を創立されたのである。かの大梅山には池いっばいに蓮があつて衣にはことたりて、縫い合わせる糸なども必要なかつた程であつたが、鳳山にはそれはない。けれども白雲がある。古人が、「霧露雲霞、体上の衣」といったが、時節それぞれに四山に白雲がたなびき直に我が坐禪の衣となつてくれるのである。実に天地一枚の坐禪の衣ではないか。